

近現代フランス音楽！

2021.4.11

小さい時にはピアノを習ってました！という人やちょっとしたクラシック音楽ファンならば必ず知っているラヴェルやドビュッシー。この二人にフォーレを加えて、3人の作品がこれぞフランス音楽といえるのかも知れない。

今回取り上げたのはカブレ、プーランク、デュルフレの作品。20世紀前期～中期に活躍したカブレ、プーランク、デュルフレは「アフターフォーレ、ドビュッシー、ラヴェル」といえる。

フランダースの犬でよく知られたフランダースとは英語の言いまわしで、フランドルとも言われる。オランダ、ベルギーそして北フランス一帯を指すのだが、このフランドルを名前にいただくフランドル楽派と呼ばれる音楽がやがてヨーロッパの音楽の中心となる。それは、ルネサンス音楽の最盛期、15世紀後期から16世紀にかけてである。オケゲム、ジョスカン・デ・プレ、ラッソなどがミサ曲、モテット、そして多くのシャンソンを残した。これらをイタリアで引き継いだモンテヴェルディが、やがてバロック音楽の扉を開いてゆくのである。すなわち、フランドルの音楽がモンテヴェルディがバロック音楽の扉を開くまではヨーロッパ音楽の中心として輝き続けたのである。その後、イタリアを中心に発展を遂げ、やがて、「様式」を打ち立てたドイツ音楽が、その後長らくヨーロッパ音楽に君臨し続ける。古典派の音楽、すなわち今日の「クラシック」音楽の名称にまでなってしまう。大天才も輩出した。モーツァルト、ベートーヴェン！この2人だけでもう十分だろう。

そのドイツ音楽の価値観から離れたのがフォーレ、ドビュッシー、ラヴェルといえる。フォーレは古典的な美しさをたたえ、ラヴェルは機能と和声完成させ、ドビュッシーはそれまでの規則にのらない、まったく新しい音楽を打ち立てた。

その頃のヨーロッパ音楽は、それぞれの民族独自の民謡等を取り入れた国民楽派やその後の民族主義音楽がヨーロッパの周辺国にひろがっていた。ヨーロッパの中心であるドイツでは調性音楽が「熟れきって」、十二音技法や無調音楽に踏みだそうとしていた。行き着くところまで行き着いていたといえる。

そこで、ドイツ音楽にない独自のフランス的な音楽をフォーレ、ドビュッシー、ラヴェルが打ち立てたといえるのだ。

では、「アフターフォーレ、ドビュッシー、ラヴェル」であるカブレ、デュルフレ、プーランクは何をしたのだろうか。

フランスの歌曲王 プーランク

プーランクは無調音楽の世界へは踏み入れず、あくまでも調性音楽、「歌」にこだわったと言ってもいいだろう。器楽曲においてもメロディにこだわっている。そして、もう一つが宗教音楽である。敬虔なカトリック教徒だったプーランクの本質を表している。プーランク独自の語法ともいえる「プーランク節」も冴え



渡っている。

オルガニスト デュルフレ

3/4+6/8+2/4+5/8+3/4...これは「グレゴリオ聖歌による4つのモテット」の第2曲「マリアはすべてが美しい方」の一部の拍子を表したものの。グレゴリオ聖歌は9～10世紀に発展し教会内で歌われるヨーロッパ音楽の源流ともいえる単旋律の音楽だ。デュルフレやカブレは中世音楽やルネサンス音楽に回帰していった。拍子だけ見れば非常に複雑だが、耳には美しく響く。20世紀に生きたデュルフレは、この中世音楽を分解し、再構成したといえるのかも知れない。まるで、チェコ・モラヴィアの民族音楽を再構成したヤナーチェクのように。



神秘主義 カブレ

グレゴリオ聖歌への回帰を見せたドビュッシーの信頼を得ていたカブレもグレゴリオ聖歌やルネサンス音楽への回帰を見せる。すなわちモンテヴェルディが扉を開いたバロック音楽以前の音楽である。バロック音楽では調性が確立されていく。調性が確立されるまでの音楽、すなわち「旋法」による音楽である。カトリック教会や修道会においては、中世よりグレゴリオ聖歌が典礼で歌われ続けてきた。私たちが耳慣れている音階(スケール)ではなく、(教会)旋法(モード)がもととなっている。それに加えて神秘的、ミステリアスな闇と



カブレとドビュッシー

差し込んでくる光が不規則に現れる。カブレの独自の世界観といえよう。いや、それはとかく唐突でとっつきにくいとも言われるブルックナーの世界観に通じるものがあるのかも知れない。もちろん、フランス音楽とドイツ音楽の違いは厳然とあるのだが。

人は文字にすることによって考えをまとめ、研ぎ澄まし、論を極めていく。作曲家も理論にもとづいて楽譜に記号化していく。音楽づくりの現場にいと、無駄をそぎ落とされ、記号化された楽譜に音楽の命を吹き込んでいるようにも思う。

具体的にいえば、楽譜の記号を「ほぐし」している。ほぐす過程で音楽の魂のようなものが宿ってくるといえる、戻ってくるというか・・・。

声による音楽の魅力はその人の声・語りによって、その人の魅力や人となりたちがのぼってくるのだ。声楽のアンサンブルはそれらが響きあい、共感あって大きな音楽が浮かび上がる。

その響きが、音楽がより大きくなるためには、「ほぐし」とともに、「ゆるみ」が大切なんだと思う。